

## 依田社について

旧丸子町は、蚕糸の町として明治の終わりから昭和の初めまで日本国内のみならず、アメリカでもその名を知られていました。丸子町の知名度向上に大きく寄与した要因の一つに「依田社」の存在があります。製糸結社「依田社」は明治 22 年（1889）にいくつかの小さい製糸工場がひとつにまとまってできた会社です。

依田社が設立される以前、小さな製糸工場は糸の価格変動に影響を受けやすく、「製糸業は生死業」と言われる程その経営は不安定でした。そこで、依田社は再繰所、検査、荷造り、出荷、販売等を共同行う企業集団を形成し、各工場の安定化を図りました。その結果、工場の収益が大幅に伸び、町全体の発展にも大きく貢献しました。依田社が行った複数の工場をひとつの会社として組織する経営手法は、蚕糸の町として既に栄えていた岡谷を手本にしたものです。

丸子町の生糸が国際市場で評価されたのは、価格の割に品質がきわめて良かったからです。丸子で生産された生糸の殆どがアメリカへ輸出され、ドレスの生地などに加工されました。蚕糸貿易の成功によって、町は経済のみならず文化的側面でも大きく発展します。貿易を通じて横浜港からアメリカの文化が直接輸入され、丸子町は信州の山間にもかかわらず当時は大変ハイカラな街でした。この頃、丸子町には蚕糸工場の視察のために外国人が頻繁に来ていました。大正 12 年（1923）には米国絹業協会会長のゴールド・スミス氏一行も丸子を訪れています。

旧丸子町の製糸産業が栄華を極めたのは明治 40 年（1907）から昭和 3 年（1928）頃までの約 20 年間で、その後の昭和 2 年の金融恐慌、続く昭和 4 年の世界恐慌のあおりを受け、依田社は急速に勢いを失っていきます。大正 11 年（1922）には 9,000 人いた女子工員も昭和 7 年（1932）には 4,000 人にまで減少しています。最盛期は 36 箇所あった工場も徐々に減少し、昭和 20 年（1945）最後の工場が閉鎖したことで 56 年に亘る依田社の歴史は幕を閉じました。



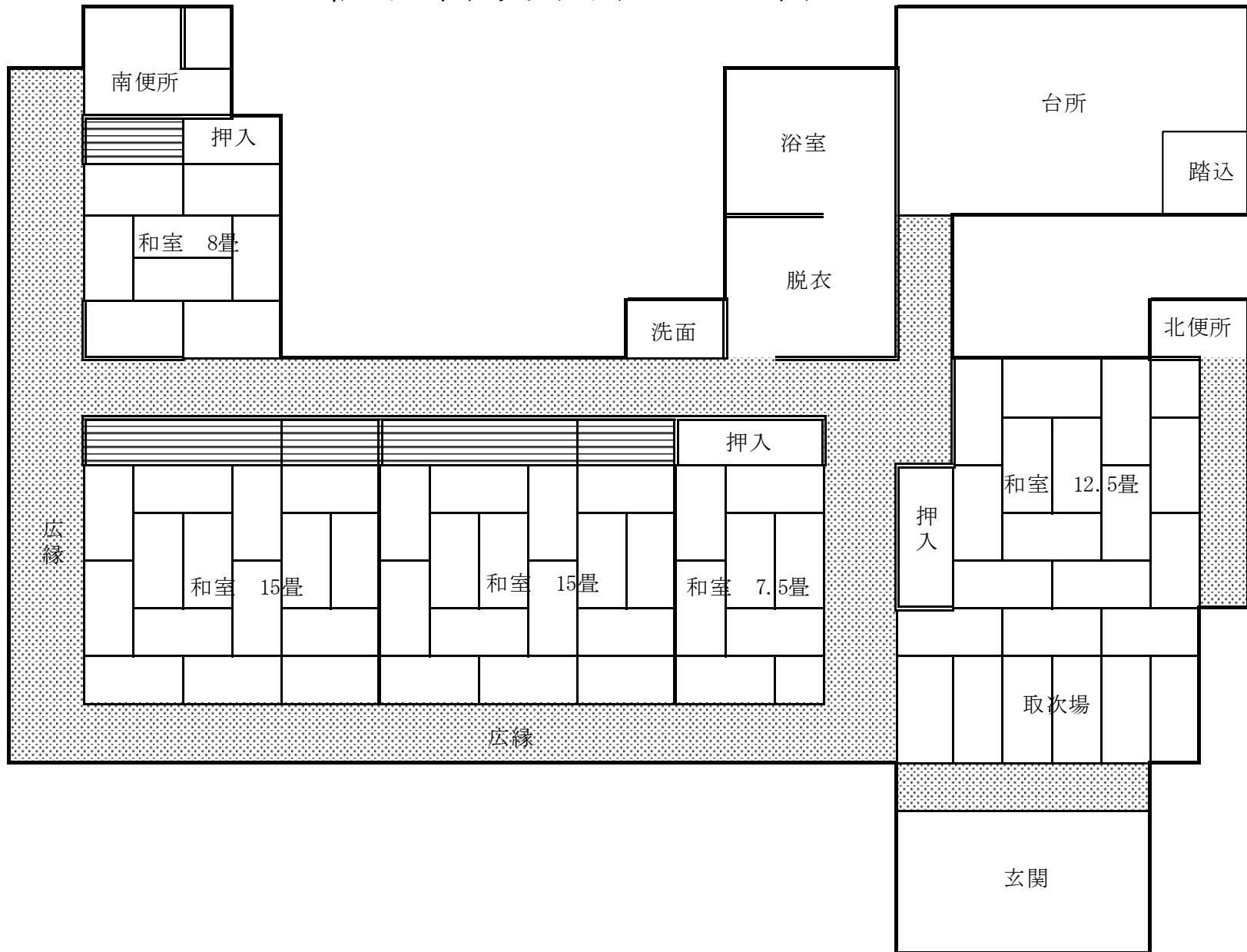
←大正 12 年（1923）  
米国絹業協会会長  
ゴールド・スミス氏  
一行の来訪

## 依水館について

依田社は、取引や工場視察にて来日するアメリカ人をもてなす為に大正 7 年（1918）迎賓館「依水館」を建設しました。

依水館は、木造平屋建で、かぎ型に折れた部分に入母屋造の玄関がついています。屋根は棧瓦葺で起り屋根（むくりやね）、下屋は鉄板葺で、回り廊下にガラスを多用しています。賓客の接待に使ったと思われる座敷は 2 間あり、天井は格天井（ごうてんじょう）で、床・棚・付書院などを備えた端正な造りです。窓や欄間も技巧が凝らされています。また、下屋の内部は磨いた丸太を使った（丸桁）数寄屋風の造りとなっており、大正時代の建物的特徴を良く示しています。平成 18 年に上田市指定文化財となりました。

# 依水館間取図(大正7年)





安良居神社本殿



足長



手長

# 安良居神社本殿

◆丸子町有形文化財◆

指 定／昭和47年(1972) 7月1日

所在地／丸子町大字上丸子1924のイ

所有者／上丸子区

安良居神社は依田川のほとり丸子公園内にある上丸子区の氏神です。本殿は、彫刻を多く使った江戸時代末期の建築です。有名な諏訪の宮大工、二代目立川和四郎富昌の作ったもので、左右の脇障子の板に彫られた手長と足長のユーモラスな彫刻、柱にほどこされた竜・唐獅子・ぼたんなどの美しい彫刻に飾られた小社殿で、上田市浦野の東昌寺鐘楼とともに上田・小原地方の立川流建築の双壁であるといわれています。

